１ 新入寮生の土佐寮紹介

『 東京での生活 』

東京大学１年

僕が東京に来てから半年が経ちました。東京は高知とは比べられないほど人が多いですが、それにも慣れつつあります。

さて、自分の大学生活についてまず話そうと思います。自分は東京大学の教養学部で、理系なのですが理系文系に関わらず、さまざまな分野について、日本トップレベルの授業を毎日受けています。高校生の時、やりたいことが決まっていなかった自分は大学でしっかり勉強してから専門を決めたいと思ったので、進振りのある東大を選びました。

周りのレベルが高く毎日刺激を受けながら勉強しています。土佐寮には、東大の同期も先輩もいて教えたり、教わったり、勉強に関する環境が整っていると思います。

大学生活で勉強と同じくらい大切だと思っていることが人間関係です。これから社会人になる準備として、教養を身につけることはもちろん大切ですが、人は助け合いながらではないと進歩できません。土佐寮には一人一人が違った個性を持ち、今までの自分にはない考え方を持った人がたくさんいて、その人たちと仲良くなることで、自分の考え方にも幅ができ、また、新しい繋がりから生まれる新しい自分を見つけることができると思います。つまり、将来の選択の幅が広がるということです。また、自分は、土佐寮の先輩の紹介で、土佐寮 OB で起業家の方とお話しさせていただく機会も作っていただきました。そのような、縦の関係を大切にしている土佐寮は、社会に出る一歩手前の大学生にとって最高の環境ということができるでしょう。

人間関係について、大学といえばバイトやサークル活動が挙げられます。僕は中学生の頃から続けてきたバドミントンをしたかったのでバド部に入りました。サークルで楽しくやるのも選択の一つですが、僕は高校時代に個人戦でインハイに出場するという目標を達成できなかったことが悔しかったので、大学でも真剣に活動したいと思い部活を選びました。部活では、みんなの目指す場所が一緒なので切磋琢磨しながら楽しく活動できています。バイトは、東大生あるあるの塾講師を一応やっているのですが、経験が大事だと思い今はイベントのスタッフといった単発の仕事を多くやっています。単発の仕事は毎回知らない人と仕事するので社交性が磨かれていい経験になっていると思います。

これからも、真善美を胸に日々を送っていきたいです。

『 土佐寮について 』

國學院大學１年

昨今、寮生活は敬遠される傾向にありますが、その理由はなぜでしょうか。「人間関係がわずらわしい」、「プライバシーがない」、あるいは「寮生活自体が古い」といったイメージを持つ人もいるでしょう。まして土佐寮は設備も古いので、避けられるのもうなずけます。やはり大学進学にあたって、ひとり暮らしをしたい方がほとんどだと思います。

ひとり暮らしに目を向けると、寮に入らない理由はほかにも考えられます。それは、孤独に生きるからこそすさまじく成長することがある、ということです。自分の想像力を爆発させ、恐るべき飛躍を遂げるためには、孤立が必要です。むしろある一定の期間孤立しなければ、人生の根本的な壁は乗り越えられません。友達や先輩との濃密なかかわりというものは、こういう場合には無駄とまでいわれます。私自身も、ひとりでできることに没頭する性格でした。

しかしいくらひとりでいるのが好きであっても、孤独感は少なからぬ恐怖や怒りをもたらします。私は土佐寮の一員としてさまざまなことを経験しましたが、それを総括するなら「癒し」です。つまり孤独の苦しみが癒されたのですが、それは単に仲間がいたからではありません。仲間と同じ釜の飯を食う、一緒にお風呂に入る、そしてよさこいを踊るなどの、共同体的行為を通じて癒されたのです。寮生活に時代遅れのイメージがあるのは、共同体がもはや過去のものだからではないでしょうか。

昔は、肉体的に共同作業しないと生き残れませんでした。だからこそ共同体が存在し、皆がその一員でした。しかし２０世紀前半ごろから、個人主義の浸透や技術の革新とともに、急速に共同体は消滅していきました。私にとって土佐寮は、そういう共同体的行為を体験する場所であり、過去を自分のものにできる場所です。自分の中にある文化的遺伝子を、それを経験していなくても、蘇らせてくれます。言いかえれば、過去がどんどん腑に落ちてくる場所です。

土佐寮の人間関係についてですが、面倒臭さは全くありません。変な邪念やプライドがないからです。落ち着きがあり無駄がなく、軽やかな信頼関係といえます。飲み会を断っても、お酒が飲めなくても、寮生に馬鹿にされることはありません。

東京への進学を考えている方は、ぜひ土佐寮での壮大な「癒し」を体験してみてください。

２ 在寮生の土佐寮紹介

『 土佐寮の想い出 』

明治大学４年

学生寮での生活、それは私にとって特別な時間でした。ここでの日々は、多くの経験を積む場となりました。今、その時間が終わりを迎えようとしています。私は、この場を借りて、寮で過ごした日々と、これからの未来についての思いを綴らせていただきます。

休みの日、私たちはどのように過ごしていたでしょうか。朝はゆっくりと目を覚まし、寮の友人たちと共に朝食をとることから始めました。その後、時には近くの公園でスポーツを楽しんだり、カフェでのんびりと読書をしたり。また、寮の中で映画鑑賞会を開くこともあり、大勢でワイワイと楽しむ時間もありました。昼食や夕食は、友人たちとの手料理大会となることも。お互いの得意料理を披露しあい、新しいレシピを交換することも日常の一部でした。夜になると、寮の屋上で星空を眺めながら、将来の夢や恋愛の話で盛り上がることも。私たちは、それぞれの趣味や興味を共有し、新しいことを学び取りながら、深い絆を築いてきました。それは、私が寮での生活を通じて得た、かけがえのない宝物です。

しかし、私の心の中には、就活のことで常に一つの大きな影が落ちていました。就活は、私にとって未知の領域であり、その不安は日増しに大きくなっていきました。情報収集、エントリーシートの提出、面接の準備と、終わりの見えないタスクに追われる日々。夜更かしして自己分析をし、模擬面接での失敗を繰り返し、時には涙を流すこともありました。しかし、その度に寮の友人たちが私を支えてくれました。彼らの励ましやアドバイスが、私の就活を支える大きな力となりました。

私は、多くの企業を訪れ、多くの人々と出会い、自分自身を見つめ直す機会を得ました。その中で、私は自分の価値観や、これからの人生で何を大切にしたいのかを再確認することができました。就活は、私にとって自己成長の場となりました。

卒業を前にして、私は一つのことを強く感じています。それは、私が寮で過ごした日々が、これからの人生において大きな力となるということです。寮での経験を胸に、新しいステージへと進んでいきます。

最後に、寮で過ごしたすべての日々に感謝の気持ちを込めて。そして、これからの未来が、私たちすべてにとって、明るく、希望に満ちたものとなることを心から願っています。

３ 卒寮生の思い出

『 脂汗 』

平成 29 年卒

私は卒業後、調査会社の道を選んだ。人事部での採用担当を経て、現在は調査員として経営者を訪問し、企業の信用度を調査する仕事をしている。毎日社会的地位を有する方々と接するのは緊張の連続であるが、そういえばこの脂汗を最初に流したのは東京土佐寮でかもしれない。

私が入寮した平成２５年当時は、「寮監の交代」という一大人事から日が浅かったからなのだろう。（おそらく最後の）強い学生自治意識をもった先輩方に囲まれており、さしたる抵抗感もなく懲罰委員長・よさこい委員長といった役職に就いていた。それなりに苦労した気になり、強い言葉で自治をした気になっていたそんな私が、卒寮生や御父兄の方々によさこいの寄付を募りに訪問したときである。

親に小遣いをねだるでもなく、アルバイトの対価で日銭を得るでもなく、現役寮生の看板を背負い学生自治の現状を伝え、ただただ「お願い」でお金をいただいた。髪を染め、だらしなくスーツを着、緊張しながら拙い言葉を吐くことしかできない一介の学生では、「大人」の有する社会性・余裕・度量の深さには到底たどり着けず、「営業の真似事」すらできなかったのだ。

脂汗ダラダラの私に対し、すべての方があたたかく応えてくれ、惜しみなく協力してくれた。そして、昨今の若者や学生自治の現状を咎めることもせず、ただひたすらに在寮時代の美しい思い出を話してくれた。寮をまとめていたのは、誰かの強い自治意識などではなく、寮生みんなで育む楽しい時間だったのだろう。だからこそ、現状に何の心配もしていなかったのだろう。大人の紡ぐ言葉に、独善的な危機感と情けないプライドは解け去った。

あれから１０年、私はまだまだ自身の未熟さに脂汗をかく毎日である。世間では、スマートフォンの急速な普及で個の娯楽が増え、コロナ禍を経て多くの集団の断絶がみられた。在寮生のなかには、日々の寮生活を憂い伝統の堅持を考えてくれている方もいるだろう。ただ、私個人としてはあまり気負わずに仲間と楽しく過ごしてくれれば良いと思う。そんな大義よりも、多くの卒寮生や寮監、先輩・友人・後輩たち、そして御家族に支えられていることに気づき、感謝の気持ちを忘れないでほしい。自治云々なんてものは勝手に醸成されてゆくだろう。いずれ「あの頃は馬鹿をやった」と美しい思い出話を聞かせてくれる日を楽しみにしている。